

「なぜ大阪支部は半世紀にわたる試練を乗り越えられたのか」

【座談会参加者】司会：黒井信隆（元小学校教員）
 榊原義夫（元高校教員、寶圓寺住職）、安武一雄（元小学校教員）、前田雅章（相愛大学）
 楠橋佐利（豊能町立吉川小学校）、牧野満（元小学校教員）、
 佐々木盛文（河内長野市立千代田小学校）、古川宗治（奈良市立右京小学校）

- 1) 大阪支部の成り立ち（黒井）（榊原）
- 2) 同志会との出会いから（安武）（楠橋）（前田）（牧野）（佐々木）
- 3) 支部研究の足跡を辿る（安武）（楠橋）（前田）（牧野）（佐々木）（古川）
- 4) 他団体との関わり（榊原）（楠橋）（佐々木）
- 5) 研究・実践の発信と保護者・地域とのつながり（楠橋）（前田）（安武）
- 6) まとめ～未来の大阪支部を描く～（古川）

（黒井）皆さん。50周年記念座談会に集まっていたいただきありがとうございます。今回の座談会のテーマは「なぜ大阪支部は半世紀にわたる試練を乗り越えられたのか」ということです。最初に私の方から問題提起をさせていただきます。

過去に大阪支部15年史と言うのがあって、これはキックオフの画期的な冊子で、この挨拶でも述べたんですけども、大阪支部がこれまで発展してきた背景には、先輩会員を始めとするたゆまない実験的実践研究の成果である事は言うまでもないのですが、やはり体育同志会が日本の体育スポーツの民主的・科学的発展を目指し、未来を展望する科学的な世界観を持っていたからであると述べました。体育同志会には「私たちの体育の誓い」という1968年にできたのですが、私たちはこういう誓いをしているのです。



- 一．私たちは、日本国憲法と1947年教育基本法の精神を、平和、独立、民主主義の社会建設をめざす国民教育の基軸とし、科学的、かつ創造的な実践と研究を行い、日本の子どもたちの明るい未来を築きあげていくことを誓う。
- 一．私たちは、国の内外を問わず、民主的な教育の創造をめざす教師、研究者たちと多面的に交わり、教育を抑圧するどんな力にも屈することなく、真に国民大衆のねがいに応えていく体育、健康教育の創造を誓う。
- 一．体育、健康教育の課題は、真実の文化創造から疎外され、連帯感の喪失を促進、強化されている日本の子どもたちに、科学的な体系と人間的な結合を基調とする、真に国民教育の名に値する目標、内容、方法の統一的理解を明らかにすることにある。私たちはこの課題に応えていくため、誰もが自由に意見を述べ合い、経験を分かち合っ、その責任を果たしていく民主的な組織と運営の確立を誓う。

この3つの誓いが私たちの研究の羅針盤となり、発展し続けてこられたことを忘れてはならないんじゃないかなと言うことが1つです。

2つ目は、もちろん中村敏雄さんが、大阪支部結成の時に枚方に何回も来られています。また、出原泰明さんなど、先輩会員の英知の結集が挙げられるんじゃないかと思います。

3つ目は、特に大阪支部発展のカギとなっている、3局7ブロック体制の確立です。とりわけ、85年大阪大会後にこの体制が確立したということです。それと共に会員が増えていきます。

2018年の支部活動を見ますと、支部研究が9回、ブロック研究22回、民舞教室9回、支部大会、計年間40回ほど研究活動をしています。他にプロジェクトもやっています。そうすると、大阪支部では週1回は、どこかで何かやっているというのが特徴じゃないかと思います。

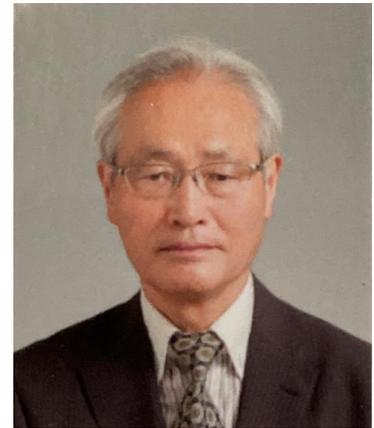
最後に支部結成から大阪で全国大会を3回やっております。30周年のキックオフで、支部大会のブロック持ち回りを確立しました。また、3局7ブロックの活動を強固なものにしました。50周年の奈良大会の位置づけは、奈良支部を結成することでした。支部は結成されなかったのですが、新しく奈良ブロックを新たに立ち上げることができました。60周年のみのお大会は、世代交代がうまくできたと言うことではないでしょうか。その後、退職者を中心にOSBG‘Z会が発足しました。2

017年です。

それでは、第一の柱「なぜ大阪支部は半世紀にわたり活動を続けてこられたのか」という一マで皆さんのご意見をいただきたいと思います。それで、まず榊原さんの方から、85年大阪大会に向けて、3局7ブロック体制が敷かれたというところから、話をお願いしたいと思います。僕の話は、すごく長すぎたのですが、皆さんには原稿用紙2枚程度で収まるよう短くお願いします。

(1) 大阪支部の成り立ち

(榊原) 少し遡って言うと79年度(80年3月)に出原さんが日本福祉大学に転勤され、土佐さんと僕が引っ越し手伝って見送りました。その時に、大阪支部を託されたという感覚はありました。出原さんがいた時の大阪支部とは、僕のような新入会員の目から見ると天王寺商業に集まっている常任委員会でした。要は出原さんのカリスマ性で支部の中央部はできてきたんです。出原さんがなくなったということは、僕にとってはカリスマがなくなったこと、同時にフリーハンドで大阪支部を建設するというので、それが自動的に自分の役割となりました。東京で活動していて、大阪に勤めた、1人隔絶した存在の全国区タレントの出原さんがいて、後はようわからんけど同志会やり出した、という風に大阪支部はなっていました。また組合の教研で入会したり、組合で繋がったりしていました。入りたて26~7歳の



僕は編集部やって、次の年は編集部長をやっていました。支部活動は大方30代ばかり十数名が天商にいつも集まっていて、それが大阪支部だと思っていたけども、数年やっている間に、黒井さんみたいな自立した会員先輩が出てきて、別に黒井さんに依存してない。時々、行事するからということで、黒井さんが常任委に出席したら、そこには出原さんと平気でさしでやり合っているということがありました。地域で活動して、組合もやってるし、実践もやってるし、そんな人が現れました。殿一には松下ささんがおられて、土佐さんは、天商に頻繁に来ていて、しょっちゅう麻雀やってました。土佐さんは、障体研という別の組織で、自分の活躍の場を持っていました。すばらしい実践を展開していて、僕は生野養護の青年部長してる時、その土佐さんにスカウトされました。だから、出原さんと少しの距離があったのです。職場が自転車で10分ぐらいの所だったから、天商にはしょっちゅう行ってました。少し空き時間があつたら、常任とか関係ない時でもちょっと相談したいと思ったら自転車で走って一時間、そんなこともよくやってた。出原さんはすごくよく面倒みてくれました。出原さんがなくなった時にすぐに支部長をやってくれたのは、新堂達夫さんでした。新堂さんは東京教育大学の紛争があった時の自治会長でした。だから、別に黒井さんに依存するということではない人たちも結構たくさんいました。ぼくより年長の人たちで自立した活動家が大阪支部にごろごろいました。阿部さんとかも確か矢田問題で闘っていました。健康教育実践ですごい実践をやってる中学校の先生。だからそういうことに気づき始めたというのも一つの発想のきっかけでした。カリスマはいなくなって、喪失感は多少あったけど、自立してやっている人もたくさんいる。そういう人たちの力を組織できるようにシフトしていったのです。ブロック制の着眼はそれですわ。出原さんのいない支部を預かって…、言うてる間に大阪大会が来てしもうた。これは30代前半の頃の話です。

ブロック制に関しては、ジェネラルな力を持った会員が支部に結集してないだけで、そういう人がブロックにいてる。総合力のある人が、地域で活躍してもらえる方が、たくさん人を組織できるやろと思ったのでブロックを立ち上げました。一方研究団体やねんから、研究を引っ張っていけるスペシャリストも作っていかなあかん。ブロックだけでなく、プロジェクトも必要じゃないかということで、同時に大阪大会の2年前かな、プロジェクトの方針案も出しているんですよ。だから、ジェネラリストとスペシャリストの両方を育成することを狙っていた。

それから、部局体制も、国の仕組みでいうと、三権分立みたいなもんですわ。それぞれが自立して、相互批判できるような組織にしとかなあかんと考えたんですよ。出原さんが抜けて、常任体制も変わったんですよ。新堂体制になったら、一年も経たんうちに、昔天商に集まった人がいなくなつた。淡口さんもすごく仲良かった人で、全国大会も一緒に行ってたけど、潮が引くようになって、そして誰もいなくなつた。まあ本当に土佐さんぐらいが古い繋がりだ、一からやり直しでした。逆にいうと、フリーハンドで、どんな体制でも、組織としてできることを追求した。カリスマやタレントに頼らなくて、ずっと長く活動できる、今の言葉でいうと、持続可能性の大きい組織づくりで、組織の力で総合力を高める方が発展性があるとして出来ることを追い求めたんです。

新30代が部局に入って、85年で167名の会員。本当に高度成長を一気にやってる。我々が青年部から30代に入り始めた時期ですから、若い人がぎょうさんおったというのもあるねんけど、打てば響くというか、発信をガンガンやってたら人が集まってくるみたいに、一気に行き、その体制が今維持できているというのがすごいです。メンバーも新陳代謝で、6割ぐらいは変わってしまったるんちゃうかな。時々呼ばれて行っても、半数ぐらい、僕が会ったことのない人やから。みんな話したらめっちゃめっちゃ優秀やし、僕ら若い頃そんな賢い奴はおれへんかった(失礼)。それと、もう一つ。黒井さんの話で抜けていたのは学習会です。これも出原さんが去る前に、月曜学習会を始めてる。ちょうど1979年に岩波講座13巻。当時の教育学の最高峰が執筆した講座が出たんですよ。それを週単位でやったわけ。4巻は『子どもの発達と教育』太田堯。日本教育学会会長で東大の先生で、民主的教育学の代表者、この人を中心に編纂されたものです。すごくグレードの高い全集です。これを興味ある巻から順番にやった。月曜学習会なので毎週やるわけやね。年間40回位の学習会をずーっとやり通して、これが大阪大会が済んで1年ぐらいは続けたと思う。最初から最後まで来てたのは橋詰さんと中川さんと僕です。その間に結構広がりが大きくて、十何人か来てた時もあった。国語の教師とか美術の教師とか垣根を越えて教育学を自分らで学んだ。僕自身は教育学を紛争中の大学で学んだ覚えがないけども、自分の教育学は全部この岩波講座「発達と教育」なんです。ここでは理論学習をすごくきっちりやった。ヴィゴツキーを知るのも29歳位の時で「発達の最近接領域」がずっと自分を導いてくれた。目を開いたのはそこなんです。だから、そういう学習会を切らずにやってきた。支部がへたってきててもプロジェクトでは、何らかの学習会をやってたでしょ。障体プロなどは、障害児の発達論をちゃんと勉強してるし、健康教育プロジェクトは今でもヴィゴツキーの学習会だけでも120回もやって、ものすごいことやっている。当時もそういうことをやり続けた。5年以上続けた。勉強しながら実践もやっていて、組合もやっている。そういう育ち方をみんなやってきた。ここは全然基礎力が違う。僕はサ連協も15年務局長をやってきた。大阪で見ると勉強も実践も酒飲むのもみんなやってるといふのはない。勉強だけでも同志会が一番。そういうサークルを85年に合わせて、シミュレーションしながらやってきた。実は支部大会をシミュレーションとして大阪大会をやったのは、皆は理解してはねんけども、大阪大会の中でポスト大阪大会のシミュレーションもやってたんです。入れ子の構造で支部大会も大阪大会もやっています。一年半前に実行委員会が発足して軌道に乗って、一年前の時から、ポスト大阪大会を口にしてました。大阪大会を運営しながら、大阪大会済んでから何をゲットしていくのかということも皆は全部考えてやっていたんですよ。とにかく、全国大会が終わって、潰れる支部が多かったんです。広島大会の二井岡実行委員長が死にはったし、僕の次にやった草津の伊藤孝さんも、教師辞めてしまっている。ものすごく消耗するというのがある。僕は警戒感もあった。「ハードなことをやって全部財産に変えよう」という思惑があって、実行委員も全て分科会に出席できるような体制を組んだんです。松下さんに子ども学校をやってもらったと、土佐さんに保育をやってもらった以外は、大会に関わりながら勉強もできるという体制を敷いてやっていた。それは大阪大会の後どうするのかということで、ありとあらゆる全部考えてやったと思います。

(黒井) そしたら、僕も含めて、ちょっとしゃべりすぎなので、時間に終わらないということもあるので、以後は、時間を気にしながらしゃべってもらいます。

(2) 同志会との出会いから

(黒井) 5年前まで全国常任をやってた安武さんから見て、全国と大阪とか、大阪の役割とかあったと思うのですが、いつも中央に対して文句も言い続けている安武さんの愚痴をよく聞いたんですけど、安武さんなりに大阪をどう見ているのかを教えてください。

(安武) 全国で言ったのは、お金のことだけです(笑) ぼくは79年の京都(大会)田辺で入ったんですけど、そこで、たぶん和田さんやったかな、昼一人で食べてたら誘ってくれて入ったけど、大阪支部があるなんて全然知らなかった。それで80年の多分春くらいに豊能三島で安孫子さんが中心になってドル平の実技教室みたいなのがあって、そこへ行ったのが初大阪支部デビューやったと思います。出原さんが出て行く直前、ちらっと天商で学習会やったのを知ってます。

(榊原) 最初からいてたんやね、月曜学習会、安武さんは。

(安武) どの辺が最初かわからへんけど…。それで、30代なるかならないかいうくらいの榊原さんや新堂さんたちが精力的な活動をしてて、そこへ入っていくという感じで、だからポドテキスト研究というのを、ぼくは編集で入ったと思うけど、あれ生野かな？

(榊原) そや生野工業やな

(安武) 卓球台みたいなのを囲んで侃々諤々とやってた。それをちらっと聞きながら編集をやったというのが最初の支部活動の記憶です。その頃会員が160とかになったでしょ。あの頃、ちょっと前なんですけど革新自治体というのが70年代一気に広がって、その余波といたらおかしいけれども、その頃に育った労働組合とかがまだまだ元気で、教職員組合では、ぼくは吹田やったけど、100%全員加入で、だから当然教育委員会もそこを無視できない。だから対等までは行かへんけど、主任制闘争なんかでも夜遅くまで学校の体育館に集まって対市交渉をやった。しかもその頃給料がどんどん上がる時期で、その頃全国でも大阪が給料がよかった時で、そういう前進的なトーンがすごくあったなと…。だから民間研究団体も、どこも人数を増やしてた。だからきちっとした研究をしてアピールを発信できてたところはどこも増えてたし、革新自治体を経験している大都市、京都とか東京とか大阪とかはみんな組織的にも伸ばしていると思うんです。その頃は頑張っただけ増えていく、そんな時代やったんじゃないかなと思います。その後右傾化が進み、組合も分裂させられ民間研もだんだん弱くなっていくんですけど、大阪支部がすぐにぼしやらなかったのは、もう言われてしまったけど、入った時から「ポスト85」とかいつてたから。「まだ85年になってないのに、なんでポスト85なんやろ？」と思ってたけど、やっぱりそこを見通しながらやったと言うことがすごく大事なんじゃないかなと思います。だからその後、奈良でやる時も箕面でやる時もある程度終わってからのことを考えながら大会を開いていくと言うことを、大阪はやってきてんのちゃうかなと思います。



(黒井) 大阪大会で楠橋さんとか大レクに、今でも思い出すけどやってくれて、85年、あの「御園」か…前田さんもその頃入ってきて…まずは楠橋さんから

(楠橋) ぼくは、ラッキーだったかアンラッキーだったか、赴任した学校に安武・渡瀬・三浦という三人の同志会員がいて、河野さんがぼくと同じ時に東大阪から来て、小規模校の中で同志会員が最大6人いました。そういう中で安武さんとぼくは同じ5年生担任。安武さんは、愛想悪い人でしたけど(笑)、渡瀬さんがぼくの家のおすぐそばで、まだ車持ってなかったの、ずっと渡瀬さんに車に乗せてもらって行き帰りさせてもらってました。ぼくが一番はじめに飛びついたところは、体育でした。講師経験の中で体育が一番難しかった。体育って教科書ないし、指導書ないし、45分どうすればいいか一番困った教科で、(講師で)二校目の学校で跳び箱の授業していて、一人骨折させたんですね。いわゆるみんな並べて自分がとべる段をそれぞれにとぼして、ぼくはとべない子の所にいて、とぼせるみたいな…。とぼし方もわからない中で…。そんなことしてて、骨折したということもあって、すごく体育に対するトラウマがありました。

新任1年目の5年生で、ラグハンドで球技大会をしていて、安武さんの授業を見てたら、横で(子どもが)何か書いているんですよ。「それ何ですか？」って聞いたら「グループノートや。」ということで、そういうことするのかと…。その後しばらくたって同志会に入ってそういう話をしている内に、はじめは体育って何をしたらいいかわからないと困ったけど、今度はやること多すぎて困るみたいなふうに変わっていきました。もう一点は、初任の年は1985年で、大阪で全国大会の年。渡瀬・三浦が「ピッチングドル平」っていうのを全国大会で提案する対象になって、いきなり渡瀬さんに「おまえ行くぞ。」と言われて、山見さんという方のお宅だったと思うんですけど、水プロに連れて行かれた。実は組織の中で、一番最初にそこに行ったんです。で、なんか話聞いて「ああそうなんか。」と思いながらいると、「はい、楠橋さん宿題ね。」と中川さんから言われて、水泳の感覚づくりみたいなことを考えて来てっていわれて、水プロからスタートしたという感じでした。だから、榊原さんが言ったように、プロジェクトがあったと言うことはすごい大きいのかなということを思いました。

そうこうしているうちに85年が終わって、すぐにベースボールマガジン社の『走る』の執筆活動に入って、ぼくの家みんな集まって、安武「短距離」、楠橋「リレー」、渡瀬が「ハードル」、三浦が



「ペースランニング」、河野が「低学年の障害走」、という章立てで、編集統括者として榊原さんも来てくれて、行ったリレーの実践にぼくははまったんです。だから実践的にはまったのは、陸上です。ボールと違って、やったことが特にリレーは形となって現れるということで、「こんなうまいバトンパスできるようになるんか。」ということ自分をやりながらも思いました。たまたまそのビデオをぼくが、当時の大きなポータブルのビデオのデッキを運動場に持ち込んで、真ん中でずーっと撮っていたのが残っていて、いつやったかも一度実践報告しろと冬大会に連れて行かれたんです。前田さんが「こんな実践やってる人はもういない。」なんて嘘ばかり言うからそこに無理やり再提案させられたんですよ。でも、それ（ビデオ）を見たらみんな

「オーっ！」って言うんですよ。「うまい！」って。でもぼく、2年目やったんです。2年目の教師がこんなに（うまく）できるということじゃないですか。もちろん安武さんもいたし、いろんな人が周りにいたからでしょうけど、そんな科学的な「系統性を踏まえた実践」を行えた。そして、もう一本はドル平。ぼくは初めてあれでバタフライが泳げるようになりました。ピッチングドル平で。要するにリズムと腕のかき、呼吸との協応、そういうことを意識しながらゆっくり泳ぐと泳げるようになる。それは、ぼくの中では画期的なことでした。そうこうしているうちにブロックはブロックで、当時は三島と豊能が別れてたと思うんですよ。三輪さんや橋詰さんや吉田さんたちも岡村さんの家に集まってそこでブロック委員会をしていて、ブロック活動にも参加していました。ぼく独身でしたから渡瀬さんに「行くぞ！」って言われたら「はい。」ってコバンザメみたいにくっついて行って、安武さんはぶっきらぼうやったけど、だんだんぼくがなかなか面白い奴やから、うちの家に来て泊まったりしてだんだん仲良くなっていったんですけど。そういうことからみんな含めたらさっきのところに戻っていくのですが、榊原さんが言ったように、支部の中にある様々な組織がそれぞれに責任もってやってきたということ。それがね、「組織作りのための組織じゃなかった」というところが一番大きい。要するに研究のための組織づくりであるということ、ここが一番のポイントだったと思います。だから、今こそブロック活動をもう少し活性化していくということかなと思います。結局ぼくは、その中で大村さんが率いる研究部に所属したんですけど、その次の年に大村さんが子ども生まれたから研究部長を一旦おりとって、それでぼく研究部2年目で研究部長させられたんですよ。それで、わけもわからないうちに、支部大会やるとなるとテーマを考えて常任で報告したら、黒井さんに「こんなテーマあかんやろ。難しすぎる。」などとダメ出し食らったり…。まだわけの解らないうちに、走り幅跳びの実践をやって、その後山本ま一さんの88時間のサッカー、澤口さんのフラッグフットボール、とやっていきました。その頃に船富さんが研究部に入ってきて、当時鳴野の黒野邸で澤口さん合わせて4人。それで船富さんの車あるなあとって部屋に行ったらいない。そしたらパチンコ行ったりとか…。忙しい中でも、ゆっくり時間が流れていたような気がしました。そこでいろいろ、政治の話や情勢の話などを船富さんから聞いて。そんな話の中で自分が違う世界を知っていった。また、水プロで、中川・黒野・内田・元井の中に澤口・佐々木・牧野と入ってきて、そうそうたるメンバー、個性ありまくるメンバーの中でやれたのと研究部長に早くならされて責任持つことをやってきたことがここまで続いているのかなとも思います。競争研究の話は、また後で…。

（黒井）そしたら次、前田さんの方から

（前田）ぼくは、84年の第2回支部大会能勢大会が初めての同志会との出会いです。その年に、いろいろ回り道して教員になりました。28才の初任で、熊取町の小学校に赴任しました。そこで、組合の方が同志会のビラを机に置いたのでしょ。同志会の能勢大会と民舞教室の案内のビラでした。その前年に講師をしていた時、松原の組合教研でわらび座オルグの方のソーラン節を見たんです。そのインパクトがすごくて、教員に採用されたら、絶対ソーラン節を実践したいという思いがありました。同志会のビラには、民舞教室とか支部大会でもソーラン節をするというので、能勢まで車で行ったのを今でも思い出します。「どこまで行かすんやろ」と思うくらい遠かったです。その支部大会では、最終的にはソーラン節をやらなかったんです。念願のソーラン節は、民舞教室をいくつかまわって覚えました。その時の指導法が全く「おっしょさん方式」で、覚えられないのは自己責任みたいな感じでした。当時の安武さんの指導は、そんな感じで（笑）。安武さんから「2～3回来ないと、ものにならへん」と言われて、それでやっと覚えて、その年の



運動会でソーラン節を学年の先生方を巻き込んで実践しました。学年主任は歌、音楽専科の先生はキーボード、そして、僕が太鼓と全部生演奏で行いました。子どもや保護者、地域の方の反響は大きかったです。

その支部大会の時に、同志会すごいなと思ったのは、研究もそうなんですけど、当時、渡瀬さんが能勢大会現地実行委員長で、安武さんが研究の総括を報告されて、本当にぼくと歳あんまり変わらないのに、多くの方の前で堂々と大会の趣旨とか研究の内容などを話されていることでした。あと、大レクで全員がソーラン節を踊ってたんですよ。参加者全員が…。あれには驚いて、全然、同じ職場の先生方と持っているものが違うなと思いました。あの強烈な大レクの勢いで同志会に入会しました。

その後は85年に向けて、ぼくの場合、研究と言うより黒井さんの後をついて、組織のことばかりずっとやりました。85年大阪は、一応サッカー分科会の司会とか運営はやりましたが、まあ裏方に徹したと思います。それから、民舞にはまって、運動会だけじゃなくて自分の授業でやったりして、大阪支部の舞踊プロジェクトに入り、教材の開発というか、そういうことをやっていました。今から振り返ると、それがぼくにとって一番身になったのかなと思います。

(黒井) あと、牧野さんから



(牧野) 私は85年大阪大会の後に入会していたと思います。全国大会に行ったのは90年の高知大会で、そこでは、既に水泳分科会に出ていたんで、それ以前に、支部の水泳プロジェクト(以下水プロ)で活動していました。同志会との出会いは、支部よりも水プロからということになります。ドル平は、学生の頃に和歌山支部の原先生から授業で教えてもらっていて、初任の養護学校で子どもにドル平を教えていました。その後同和校に転勤したのですが、偶然にも、水泳指導にドル平が取り入れられていたのです。しかし、泳げない子のためにする学力保障のドル平であって、ドル平の形も違って、よく分からないということで、初めて水プロの実技例会参加したのです。庄内の温水プールで、中川さんや黒野さんに思い切り泳がされたのを覚えています。そのとき一緒に横におったのが澤口さんでした。そこから水プロに関わるようになります。

水プロに参加し始めて、水プロの人の実践がとても新鮮でした。子どもと問答しながら水泳の授業始めるというのが。そういう実践聞いていて、自分もやってみたいと思い、そこから水泳の実践にはまっていくんです。また、水プロを通して学習の集団論であるとか技術指導の系統性のこととか、同志会の思想はそこから学んでいったと思います。それで、大阪支部というのは、幼年の人たちは全国と民舞で繋がったり、各ブロックでは中心になる濃い人にも集まる。そういうのがあって、なかなか中央には来ないけども、ブロックのその人の下にも集まる。泉州であるとか北河内であるとかそういう感じですね。いろんな所で繋がりがあって、継続した繋がりが組織を支えてきている。それが長く続けられてこられた秘訣なのかなという気がしています。

(黒井) 続いて佐々木さん

(佐々木) 私のきっかけは・・・澤口さんです。96年からですね。95年が水プロでは一つの転機になっていました。95年の東京大会で中村敏雄講演があって、そのときにいろいろ刺激のある講演があったんですね。「日本人なのに何で日本の文化を捨てたんだ」みたいな、「日本の文化である日本泳法をなぜ指導しないんだ」と言うところから、水プロでも「日本泳法指導せなかあかんのちゃうか」という話になりました。そしてまずは中村敏雄の文献を読もうと言うことで、水プロでは輪読会が始まっていました。その95年の夏に澤口さんが私の勤務校に転勤してきてドル平と一緒に実践しました。ぼくも原先生のドル平を学んで、あとで分かるんですけど「ようわからんなあ」って言いながらなんとなくできちゃったんですね、ドル平的なものは。そこで「転勤してきた人でドル平、知ってるんですか」みたいなことで澤口さんに水プロ誘われて行ってみました。そこで「近代スポーツ批判」を読んでるってことでコピー渡されて、「次はここをチューターしてきなさい」という宿題が出てということで、最初に「近代スポーツ批判」だったので、なんとまあという衝撃で、体育の勉強しだしたのがそれだったので、自分の中ではそれがストーンと落ちたというか、なるほどそういうことかと言うことで同志会に入りました。



この質問に関して言うと、もう皆さん言われていることで、支部大会を各ブロックでやってることがとっても大きいなと思っているんですね。それで2017年くらいかな、熊本で全国大会するって言った時に、熊本できません、あの地震でできませんといった時に、どこかの支部で担わなあかんとなった時に、ぼく自身は、そのとき支部長だったので、「大阪支部でしたいな」「引き取ろう」と思ったんです。それで支部大会、泉州大会の一日目の終わりに臨時で支部常任に集まってもらって、こんな風に考えてるけどみなさんどうですかと言ったら、「いや、反対や」って言われて「反対なんや！この流れやったら雰囲気みんなやるやろう」と思ったんやけど、「反対」と言ってくれたんですね。「大阪支部のために反対や」と…言ってくれたことが「すごい」と思いました。そういう風にきちんと議論できるのが。でも大会はできるんですよ。支部大会やってるから。それだけの力量だったり組織力だったりはあるなって思ってた、なんとなくチュチュってやれば今の全国大会やったら多分できる。前の全国大会やったらめっちゃ時間かけてやらなあかんねんけど…。と思ったので、そういうところの組織力って言うのが、支部大会を6年に一回7年に一回やることで、ブロックでの集客力であったり組織力というのは確実についてきているなと思っています。知らず知らずのうちに「大会とはどういうものなのか」とか「事務的なものはどういうものなのか」というのは学んできているのかな、というのが大きいと思います。それで、牧野さんもちらっと言ってたけど、ブロック独自の体制って言うか、色って言うか、そういうのが、中河内は中河内でちょっとかつては「おばちゃんパワー」みたいなのがあったり、泉州は泉州で渡瀬派だったり、南河内は幼年も入っていたり、北河内は今若い人たちが独自の体制を自分たちでつくろうとしていることだったり、そういうのも学びながら、豊能三島はゴリゴリが二人いるのできちんと実践報告して授業づくりしてというのをやっているの、そういうところが、独自性があるというのがいいところだな。そこからやっぱりこの間の新入会員ってブロックとのつながりで入ってきているというのがほとんどなので、そこなんかだと。それが85年以降あったんだろうなと思います。

あと、実践づくりするところが大切だと思います。実践プランを検討して実践報告して、それを集団検討してっていう一連の流れができるって言うのは、他のサークルとかにはない、官制研には特にないところなのでそれにピピッと反応してくれる人が入ってくれてるなと思います。それを継続してやってるというのが大きいのかなって思います。以上です。

(黒井) 最後に古川さん

(古川) 私は、初任校に牧野さんがおられなかったら、同志会員にはなっていないだろうと思います。最初は南河内ブロック員として活動していたのですが、今考えるとそのメンバーがとても濃かった。牧野さんをはじめ、佐々木さん、竹内さん、澤口さん。例会に参加するたび、ものすごい討議をしている光景を目の当たりにして（この中にはいつもよく寝ている人もいましたが）、自分もこの討議の輪の中に入りたいと思うようになりました。おそらく、多くの新入会員がそれぞれのブロックで同じような衝撃を受け、入会したのではないかと思います。府内各地に、このような魅力あるブロックがあり、充実したブロック活動が行われていることが、会員拡大・継続につながっていると思うのです。



私がまだ入りたてだった頃の話をもう少しすると、ブロックから支部全体に活動の場が広がると、ブロック以上の多様な会員に衝撃を受けました。ベテランの方は全然偉そうではないし（逆によくいじられていました）、圧倒的なパワーを放つ「研究するおばちゃん先生」もたくさんいましたが、みんなが同じ目線で話しています。老若男女問わずいろんな価値観と信念を持ったメンバーですが、みんなが同じ志を持っていて、自分もその一員に入っていることが心地よかったです。また、何もわかっていない自分も一人の教師として尊重してもらえたと、とんちんかん報告をして叩かれても、誰かがそっとフォローしてくれる。そんな温かさもお大阪支部の大きな魅力だと思います。

(黒井) ありがとうございました。

さて、いよいよ第2の柱に移っていきたいんです。「研究課題の成果と課題」ということでね。ちょっとだけ簡単に流れだけ言って、またそれぞれの分野で皆発言をお願いしたいと思います。大阪支部のこれまで50年間の研究史の成果や課題を学ぶことは、今後の研究課題の方向性が見えてくると思います。

(3) 支部研究の足跡を辿る

(黒井) 74年から76年では、各教材の系統を確かめながら技術に対する考え方を発展させていきました。さらに、支部発展期というのは77年から78年です。ここでは学習集団の形成、技術学習の系統を、体育の学力についても研究されていきます。いよいよ79年からはポドテキスト研究、体育スポーツの主体者形成を目指す学力研究。また、先ほどちょっと抜けてたんですけど、ポドテキストの実践ですね。それから教育課程づくり研究。で、競争研究。グループ学習研究。球技、バスケットボールなどの研究へと発展させてきたというふうに思います。いよいよ今から第2の柱に進めていきたいと思うんですけど、簡潔にまとめてください。まず79年度の研究あたりから榊原さんに、ポドテキスト研究についてコメントをお願いします。

①ポドテキスト研究(1978年~1981年)

(榊原) ポドテキストはね、今の中間研究集会で出原さんの学力論研究の発表がありました。聞きながら学力論というのがどういうものなのか、いい勉強になりました。その頃実践現場に結びつけて授業と学力という関係で問題を捉えていたんだと思いますけど、徹底的に実践を分析してみるという方法論としてポドテキスト、坂本忠芳が提唱してたものをそのまま直輸入で同志会大阪支部でやったというものです。理論的なものを引っ張ってきたのは出原さん。一緒に淡口さんに実践者になってもらって、授業案づくりをやった。寶圓寺で合宿してね、当時の研究部5・6人で侃々諤々、淡口さんと出原さんと僕が、ほとんどのことをしゃべり合ってたというような研究会やってるんです。出原さんはそれが最初で最後。それで、単元計画を完成させて、これに張り付けで取材をすると、まあ分析ですけどね。あっ、その前にぼくがまな板ののってセット例会、だから、授業案をつくることを3月例会にして、5月例会でビデオも撮りに来て実践分析、7月例会に実践報告する。だから理論立てておいてどれぐらいできているのか検証するという、それは最初僕が狙載ってるんです。その経験は大きかったですよ。ぼくはバレーボールやったんですけど、このときに本格的に同志会実践を研究して、やった。生野養護から転勤して2年目の1学期です。それが、中村敏雄のバレーボールだったんですよ。ものすごいお世話になりました。ほんとに見事に、球技なんか苦手な方やけど、理屈通りにバッチリできましたからね。アタックは飛び交ってラリーも続くという熱戦で、まあ工業高校は正直みんな授業するの困ってる世界でしたからね、グループノート真っ黒になる位書いてきてね、同期の国語教師が「俺の授業の時にこいつらこんなん書くから困るやんけー」ってね、そやけどものすごく書いてるから、「どうしてこんな書きよんねん」って、賞賛半分と苦情半分。そういう世界が工業高校でできてまして。ぼくが同志会を信じたというのは、中村敏雄について行ったというのももちろんありますけどね、そういう科学性で自分ができないようなものが理屈の通りにちゃんとできるようになったというのを自分で体感したからです。だからそれを通しておいて、出原さんのいない研究部長をやったから、淡口さんの授業計画を入念に立ててるでしょ、それに淡口さんの実践を見にも行ってますしね、それを次の例会の時に、要はね実践と実践批評との関係なんですよ、3回くらい例会やると淡口さんがやってる授業というもののいろんな意図まで全部見えてね、分析できるようになりました。授業を見る目というのは精密に計画と一緒に立てたということで本当に分かるようになりました。ぼくが実践批評が当たり前のように書けるようになったのは、ポドテキストを通してなんです。自分が書いてる文章に、「えっ、こんなことまで気づくようになってる。こんなことまで書いてる」。書きながらね、淡口さんの例会報告するのに、実践批評するのに。ところがね、淡口さんが、やっぱりあれだけ打ち込んで、熱い教師やって、「できるにかけては日本一」(出原さん)言われてたくらいやってた人が全部分析されてしもうて、なんか自分を見たというか、つらかったと思いますね。もちろん高いレベルのことやってるんやけど、自分じゃ解明できてなかったところまで全部集団で解明されてしまう。淡口さんね、あれ終わってから潰れた。だから大阪大会一緒にやることになって、全国大会の帰りに熱く語り合ってたのにね。ポドテキストで僕は彼を潰してる、(真相はわかりませんが)そういう苦い思い出があるんですよ。彼は障害児学校に変わって、いつかの支部大会で障害児分科会出てきてくれて、(僕も大阪大会で潰れて)10年以上経ってから出会って、お互いに打ち解けることできたんです。ちょっといらん話になりましたけど、そこまで徹底して人の授業に介入して、やった本人がダメージを受けたと思います。僕が書いたものの方がよくわかる。すごい力もつけたし理論も分かったし、『教育実践事典』も書きました。ポドテキストの研究については全部そこに書いてしまっただけで、以後僕の中では切れてしまっているんですけど、本当にそこまでやった。淡口さんの次にやった石谷実践で、後に出てくる90年代の文化論研究、研究部で仮説実験的教材構成して、「お前の跳び方は何年

代」これはほんまにヒットしました。石谷実践では自分で技術史を勉強して、それを教材にして授業したときにどういうことが起こるかということを実際にやってみて、山形大会に報告をした時、出原さんものすごい褒めてくれました。だから90年代にいろいろ言われるようなこと(文化研究論)はそのときに全部ポドテキストで一気にやっています。でもね実践者に相当力量がないと、あるいは研究集団として相当のバックアップ体制が組めないとかかんね。マフットボールからのサッカーを取り上げたときに行き詰まって終わったんですよ。マットはね、上田さんが頑張ってくれて、上田さんの力で切り上げた。安武さんとかがバックアップに入ってくれていたしね、上田さんのマット研究はそれなりなものになってる。上田さんもよう勉強したし、何よりも熱く生徒引っ張ったからね。面白かったんは「先生があんまり熱心やから言うこと聞かなしやあない」と言いよるんです。生工生が。授業研究で僕らも分析に入りますやん。生野工業の同僚やったからわかってる。生徒が本音でそんなこと言ってたくらいやから。上田さん、ほんまに熱意持ってやって、たくさんの成果があって、力量のある人はそれで、上田さんなんかその後研究部長3年やって、大阪大会全部彼が僕とは独立的に研究は組織してくれました。だからポドテキストがものすごい大きな力を支部に、関わった人にはね与えています。それくらいのことはやりましたね。佐々木さんの話を聞いて、支部は僕の知らない時代も単元丸ごとの授業創りスタイルの研究を粘り強く続けてきたことを知り、感銘を受けました。

(黒井) 次に教育課程づくりでやった安武さん。その後、競争研究で楠橋さんと前田さん。その後グループ学習で牧野さんという順序でお願いします。安武さんから。

②教育課程研究(1987年-1989年)

(安武) 去年の支部ニュースに書いたんですけど、それを書くためにその当時のものをいろいろ資料を引っ張り出してきて調べたんです。ぼくは「教育課程研究」は3年くらいしかやってないのですが、それは中川さんと大村さんとぼくが3人で、アウィーナの下のところに集まってしこしことやって、「ちょっと並べてみた表」とか「配列表」をつくって、それだけやと思ってたんです。そしたら、調べてみたら全然違って、それはほんまに最後の年、なんか成果を出さなあかんということで無理矢理ひねり出したことで、実はその前に、先ほど言われた85年大阪大会が終わって、内田研究局体制になってもう一回ポドテキストを見直して見ようと言うことで、ポドテキスト的な形で大村さんの「イメージマット」の実践を作っているんですね。それをほぼ1~2年で終わって体制が変わる時に支部の研究体制をガラッと変えたんです。その時に支部の研究部やったのを研究局にして、「学習部」と楠橋さんがやった「たのスポ情報部」、それに「研究部」という3部をまとめるという形です。その頃の研究部は7つのプロジェクトを統合したような形で、そこで例会をしていくことをやってたんです。そこから実践を2つずつ出して、それを分析とかもやるというような例会をずっとやってた。それとサンドイッチしながら研究局が全体として「今までの成果はこういうことやった」とかを出してたんですね。その中で、ある時上田さんに「安武の方針が変わった」といわれたんです。それはどういうことかということ、教育課程で配列表みたいなものを作ろうとして、もちろんそれに対して「大阪支部版の指導要領を作るのか」と出原さんに言われたのは知ってるんですけど、そんなんじゃないというので自分らは。その頃まだ教科内容研究といった発想はあまりなくて、なんか教材の内容に関わることで配列表のようなものを作っていかなあかんと思ってたのが、その時の例会で、もうちょっと視野を広げていかなあかん。学校づくりとかそういうこともやっていかなあかんということを言い出してるんです。その辺で上田さんが「安武の方向が変わった」と言ってた。まあ、その成果がきちんと出たわけじゃないねんけど、ずっと悶々としてた時、多分榊原さんやっと思ったと思うねんけど、「今こんなんで困ってるんです」と話したら「表みたいなのにまとめてみたら」みたいなことをポツと言われて、それで「並べてみた表」の発想ができて、作ったんです。その時に全体的な視野も必要やということで、技術的側面とか社会的側面とか組織的側面というようなことがだんだん学年によって割合が変わっていくとちゃうか、みたいなのをイメージしながら表を作ったんですね。それを受けて中川・大村・安武がそれぞれ分担して、一気に低・中・高で教材、ぼくら「内容」と言ってたけど内容になってたのか分からんけど、教材配列のちょっと毛の生えたくらいのものを作って、それ3年でおわったんです。その後の「授業づくり研究」というのは、ぼくはその時はもう学習部にいたんですけど、その「教育課程試案(並べてみた表+配列表)」を受け継いで「組織的な面では…」とか「技術的な面では…」とか言うようなことを授業づくりしていく時の視点として持っていった、という流れになっていたんです。

③「競争研究」(1994年～1998年)

(黒井) 次に楠橋さんに言ってもらうんですけど、競争研究についてね。中村敏雄さんから手紙もらったんですよ。ぼくはキックオフを送りました。それを批評してくれてたんですよ。ものすごく楠橋実践について興味を持ってて期待してると。彼も広島大学にいた時にね、授業で使わせてもらったと言っていましたわ。結構キックオフを中村敏雄さんはよく読んでいて、大学の授業で使わせてもらったと言っていました。では楠橋さん。

(楠橋) 多分前田先生の方がしっかり覚えてはると思うけど、ぼくが印象に残ったところだけ話すと、ぼくの中では、急に「違うことせい。」みたいに感じました。同志会大阪支部の雰囲気として、そうとられてたと思うし、ぼくもそうとらえていた。要するに「うまくしていくこと」で、小学校の子どもたちに、科学的な系統を持って指導してきてたわけだから、その中で、それだけでは「ダメ」みたいなこと言われた時に、いまいちピンとこなかった。けど、「競争研究」というのが転換点というか、自分の中では「賢くなった。」と思えることにつながったのではないかと、思ったんですね。きっかけとして一番影響受けたんは牧野さんの「カエル足は果たして必要か」という実践でした。これまでと何が違うかと言ったら、それまでは「どうやってカエル足を教えるか。」みたいなことやっていたのが、「何でカエル足が必要？」みたいな、ちょっとへそ曲がりなね。牧野さんの発想というか、ぼくは、当時それを「造反」と言っていました、「何でカエル足やないとあかんねん。」みたいなことで授業やった時に、「これが文化的アプローチや」というような話になって、技術的アプローチ・社会的アプローチ・文化的アプローチという3つの中で、そこが一番弱いと出原さんが言ったことが、「あっ、こういうことかな？」と思った。というのはね、ぼくも平泳ぎ、めっちゃカエル足大変やのに、カエル足なしで泳いだ方が簡単やのと思ってたこともあったから。それを子どもと一緒に解明していく中で、大学の先生かかだれかに書簡を子どもたちが送った。たいした答えは返ってこなかったようでしたけど…。でもそういうことをやるという、子どもたちがそこに向かって学習していくようなことに、「ああ、そういうことが今必要なんや。」ということは、なんかぼくの中でストンと落ちたというか。で、「競争」と言うこともスポーツの中に絶対にあるわけで、スポーツという非日常の中で行われているものを、なんかアスリートの「勝利者＝社会的な地位を得る」という風潮があって、そんなことがあるということに対しても、「なんか変やな。」とぼくが思ってたこともあったので、競争の「態度」や「方法」ではなくて、「競争」そのものの構造を、「スポーツにおける競争の構造」を教えるということは「なるほど」と思いました。そこから結局、たしか2年ぐらい理論学習をしたと思う。その中で樋口さんの「内的競争と外的競争」だとか、古城さんの「競争の持つ階層的構造」といろいろお勉強していった。メンバーは、最初、安武・楠橋・前田の三人だったと思いますが、この時期に、ぼくがたまたま結婚して「連れ合いが子ども生まれて実家に帰ってるから、ちょっと合宿しようや。」ということで3人でぼくの家に来て、研究部の学習会を開いた。その中身はほとんど覚えてないのですが、その後の飲み会だけ覚えてるんですよ。3人で飲んで、前田さんが酔っ払って同志会の偉い人たちの悪口ボンボン言ってて、(これオフレコですけど)そこが一番思い出に残ってて、おもしろかった。全部録音して後で聞いてました(笑)。そこからスタートして、少しずつ研究部員が増えて、佐々木さんとか澤口さんとか牧野さんが入ってくる中で、さらに理論研究をしていき、「実践していこう。」ということになった。一番最初が安武さんの実践、「採点基準をつくり、子どもたちにマットの採点をさせる」という取り組みで、「マット運動における表現の得点化」ということを教えるという実践を行った。その得点を巡るあれこれから、「競争の結果としての得点」で表せるものと表せないものがあることを学ばせようということを目的にする、確かそんな感じだったと思うんです。その得点の付け方を巡って子どもたちが葛藤するんですね。「この子にこんな得点をつけるのはどうや。」とかね。その葛藤とかが、ぼくは大きなポイントやったかなと思います。その後、牧野さんのリレー実践でした。何遍も同じメンバーで走らせて、タイムだけ言って、「(毎回自分たちが勝って)こんな、おもんないわ!」という「競争の条件」を前面に出した4年生のリレー実践。そして、ぼくのハードル実践というのは、「ゴールタイムで競うのか」、「伸び率で競うのか」、それとも「達成率で競うのか」みたいなことを4年生の子どもらと論議するという実践でした。全部タイム出して、この条件ではこの子が1位、この条件ではこの子が1位みたいな「1位がいっぱいおる」みたいな実践でした。こんな、「とりあえずやってみた実践」を経て、そういう競い合いの過程と結果というのを子どもたちは区別できるのかな、というようなことをテーマに研究実践をしていきました。その中で出てきたのが、「競争・勝敗」が単なる勝ち負けだけで見ると、「自分は弱い。」っていうか、要するに感覚的なものに子どもたちの考えがなってしまうので、やっぱりそこに「スポーツの競争に関わる歴史的

な変遷」というようなことを考えて入れていかないといけないということで、「歴史的な視点」が大事になってくると考えて、それを教えるために「丸太投げ」の実践（その前に「混成競技」）、で「丸太投げ」や「ハンマー投げ」とやっっていく、という流れになりました。

ぼくの中では、言い出しっぺは多分ぼくだと思うけど、「丸太投げ」の実践が一番思い出に残っていて、この実践は、スポーツの発展過程とか社会的背景やルールや道具の変遷、それに伴っての技術ということや学ばせるんだけど、小学校の場合実技を通して学ばせないといけないのではないかとということで、考えたんですね。そしたら、今までやった例えばサッカーとかだったら、いろんなことが分かってるから、子どもたちが全然知らない競技をやった方がいいということで、それじゃ「丸太投げ」させてみよかということになって、丸太を投げるということになったんですね。この時に、ぼくの知り合いの能勢の先生に相談したら、「うちの山の間伐材持って行け。」ということで、切りだしてくれて、ぼくがそれを伊藤さんの学校まで運んだりしたこととか、当時イギリス旅行に中川さんと黒野さんたちが行って、スコットランドの「ハイランドゲーム」を写真や動画に撮ってきてくれたり…。当時ユーチューブなんてないですからね。そんな事があったりして、多くの協力者があって実践できました。しかし何といっても、一番大きかったのは伊藤さんという実践者が、本当に真摯に、前向きにやってくれたんですね。そのことがぼくの中で大きかったなと。まあ、海のものとも山のものとも分らん内容をね、本当に真摯に情熱的に行っていたいただいたこと。もう一つ、あの当時の伊藤学級の子もたちは、けっこうやんちゃな子どもたちで、先生らも手に余っていたと聞いていました。それを伊藤さんが受け持った時に、16時間だったと思うんですけど、すごくこの実践に乗ってやってくれたんですね。要するに丸太一本置いて、「さあ、これでなんか競い合いを創りましょう。」みたいな、そういうやつですね。どこに狙って投げるとか、強く投げるとか、そういうことがあって。スコットランドのハイランドゲームはスポーツにならなかったけども、丸太が投げた向こう側に飛んできれいに倒れたということで優劣を判断するのだ、というようなこととかを学んでいきました。そういうのをエネルギーに創り上げ、子どもたちがすごいノットということがあって、ああなんかこういうことをやってみて、「競い合いの仕方によって決着の付け方も変わる」から、そういうことも変わってくるんだ、ということや学ばせた実践ということで、ぼくの中でここが一番印象に残ってます。ただ、その後のハンマー投げの実践はね。ぼくの中で力尽きてたというか、自分の中で、もう終わったというのがあって。もう一つはね、「競争の先鋭化」というのがテーマになってたんですけど、なんかここがぼくの中では今振り返って思うんですけど、文化的アプローチではなく、社会学的アプローチに寄ってたんちがうかなと思っていて、ある種「スポーツの批判的な観点」を子どもたちに植え付けるという気がして、「ちょっと違うのではないかな。」という戸惑いがあったと思います。たぶん前田さんが「競争の先鋭化」の話はずっとやってたんで、前田さんが語ってくれるかなと思います。ただこの競争研究によって、支部例会は閑古鳥が鳴いていました。要するに中身が難しすぎるということでした。「そんなん、研究部じゃなくてプロジェクトでやったらええねん。」という声も聞こえてきたりして…。ただぼくの中では、ここが一番面白くて、「子どもらがそういう実践やっても乗るんや。」というところを目の当たりにして、面白くないと実践というのは続かないし、そこに面白みを感じてくれたことがよかったかなと思います。

（黒井）じゃあ前田さん

（前田）大阪支部が「競争研究」に突き進んだのは、「教科内容研究」でだれも手掛けていない領域である「競争」を現場教師が取り組むことに意義を感じたからだだと思います。

1991年埼玉大会で出原さんが「教育課程私案」を提案されました。埼玉大会の教育課程分科会ということでしたが、提案集には出原さんの資料が残っていないんです。たぶん、別刷りで持って行かれたと思います。その翌年の知多大会の全体の基調提案で、出原さんは、3つの教科内容の柱、「スポーツ文化の発展論」「競争・勝敗」「技能・技術・戦略・戦術」が体育の教科内容の全体構造を示すものと言われました。ここから同志会全体が教科内容研究に足を踏み込んだこととなります。その年、知多大会で愛知支部は支部総会で跳び箱運動の研究を決定されました。このように、「教科内容研究」を意識した実践や研究を支部や個人での取り組みが出てきましたが、同志会全体で「教科内容研究」を追求するという雰囲気にはなっていませんでした。

この1993年12月の「たのスポ」で出原さんが『体育実践に新しい風』というタイトルで「教科内容研究と授業改革」を訴えています。実は、この年の12月（冬大会）で、出原さんと進藤さんが論争しているんです。「体育教育における技能習熟の教育的価値」を進藤さんが特別報告でされて、同志会全体もまだまだ「技術指導の系統性が大事とちがうか」「わかる・できるが大事と違うか」という意見

が多く、なかなか出原さんに同調しなかったと思います。

また、この1993年の冬大会で、出原さんに言われたのでしょうか。楠橋さんが次の年の1月号支部ニュースで、「出原さんが、大阪支部の研究レベルが落ちてる」と書いています。その時支部研究部は、山本雅行さんの実践を創り上げた時です。船富さんも94年の5月号支部ニュースで「出原さんに大阪支部の研究は落ちてる」と言われたと書いています。当時、船富さんが研究局長、楠橋さんが研究部長でした。その二人が「大阪支部の研究はあかん」と、ぼろかすに出原さんに言われたと支部ニュースに書いているんですね。

94年になって安武さんが研究局長で、ぼくが研究部長になりました。出原さんが大阪支部研究をけなした意図は、大阪支部に「教科内容研究をしっかりとやれ！」というエールだったと思います。それにしても、ものすごい圧力があつたんです。

このころになると、他の支部は「教科内容研究」をやり始めていました。ただ、さっき言った「競争」は、他の支部は全然手をつけなかったんです。「これに手をつけると泥沼に入る」というようなこともあって。大阪支部は、やっぱ他の支部が手をつけないうちに、出原さんの挑発というか、誘いやアドバイスもあって「競争研究」に乗ったというのが、事の成り行きであったと思っています。それが5年もかけてやったということです。

先ほど、楠橋さんが言われたように、文献研究を2年やって、「とりあえず実践」がありました。「とりあえず実践」で、安武さんとか、先ほど楠橋さんが述べられた実践があつて、最終的に集団でワークづくりから取り組んだのが伊藤実践なんです。これ、「たのスポ」や提案集など、過去の資料をいろいろ調べたんですけど、この伊藤さんの実践を、集団で分析、総括しているんですよ。みんな。安武さんは「競争の過程…」のタイトルでまとめたし、楠橋さん、澤口さん、前田もまとめて文書に残しています。それに全国の同志会のいろんな研究者が応えてくれています。例えば「共同」といって唐木さんが。森さんもかなり私たちの「競争研究」を読み込み研究を深めてくれて、それに私たちも反応したりとか。一番面白かったのは、マット運動の山内さんが「共創」という言葉を言い出したんですよ。安武さんがそれに噛みついて、「ちがうやろ。ぼくらのやってることとは違う！」ってえらい反論したのを覚えています。支部例会の参加は、なかなか閑古鳥で、だれも相手にしなかったと思えたので、研究部のみんなは「競争研究」の発信を文書でたくさんしたと思います。

この競争研究の「丸太投げ」実践は、長野大会の教育課程分科会で発表しました。その際、当時山口大学の海野さんが音頭を取って、大レクで「丸太投げ」の寸劇をやりました。海野さんは、現場教師が、ここまで文献研究やって実践してきたことにすごく感激されて、その年に教育課程プロジェクトを発足させたんですね。研究者も現場教師に「負けてられん」と言うことでした。

そして、その後7年越しに、このプロジェクトは、『教育課程試案』が完成させました。まあ「競争研究」が研究者の心を動かして、やる気にさせて、ああいう大きなプロジェクトが生まれて、『教育課程試案』発刊に結実したと言えます。そして『教育課程試案』が元になつて『輝くシリーズ』が発行されたと言うことですから、「競争研究」が同志会全体の大きな教育研究運動のうねりを創ったというのは、私たち大阪支部は自負してもいいのかなと思います。

最後に、ぼくも楠橋さんと同じで、「競争研究」が始まる一年前に、冬大会で牧野さんが「カエル足」の実践を報告されたことがすごくインパクトがあり、そこがやっぱり大阪支部の「教科内容研究」や「競争研究」の出発点だったのかなと思います。以上です。

④「グループ学習研究」から「実践研究」へ（1999年～2004年）

（黒井）そしたら、牧野さん、グループ学習のことをお願いします。

（牧野）グループ学習研究は、澤口さんが中心となつて4年間行ったのですが、何でかわからないけど、最後の一年間だけ、私が研究部長となつたのです。その研究の成果を、全国大会（広島大会）で報告することが決まっていたようなんです。グループ学習研究で残っている思い出は、広島大会で出原さんを始めとするグループ学習分科会の人たちに酷評されたということだけが残っています。中身は覚えていないのですが。支部研究の最後の一年は、「同志会のグループ学習と生活指導はどう違うのか」みたいなことを知りたいと思って、それで全生研の人を呼んで話を聞いたりしました。京都の藤木先生という中学校の体育の先生でした。まあその人の言うには「子どもが必死なつて書いているのはいいけども、そういう姿がいらん。もっともっと運動させなあかん」という話でした。全生研の人たちから見ると、「まどろっこしい」と思うのでしょうか。私が覚えているのは、そんな話ぐらいいかな。私は、澤口さんと入れ替えて、事務局から研究部に移つたので、それまでの研究の中身はよく分から

ない。中心になって進めていたのは澤口さんだから。それで、どんなグループ学習研究を澤口さんがやってはったかは、佐々木さんは覚えてます？

(佐々木) 飛田さんの学校とかで実践作ったな。フラフト荒れた子どもたちをなんとかしようと考えました。しかし、そんな甘いものでもなかった。でも飛田さんの実践力でなんとかグループ学習を進めてくれました。

(牧野) やっぱり「荒れ」ですね。子どもの「荒れ」とかがすごくクローズアップされた頃だったから。フラフトのグループ学習で学級を立て直すみたいなのが流行っていたのでしょうか。今思えば、それを目的に実践すること無理があったのでしょうかね。

私が息を吹き返すのが、その後の実践研究です。奈良大会に向かう2003年、2004年の2年間やったんです。グループ学習のような難しい研究をまとめる力量がなかったので、もっとわかりやすい研究をしようと実践研究にしたのです。そのきっかけは何かといたら、大阪支部にいろんな実践があるのですが、それを支部の人が知らないことが多く、これはちょっと考えものやぞと思えました。奈良大会までの2年間で、とにかく大阪の人が大阪の実践を知って、そこから学ぶことも必要だろうということで、2年間で13本の実践報告をしたんですね。いろんな人がやってる実践を聞く。そして、それに分析批評するという流れで例会をやりました。また、職場の人に同志会の実践を広めていく時に「50時間の陸上、短距離走」だとか「80時間のサッカー」なんて受け入れられるはずがない。とにかく授業を10数時間（15時間以下）にスリム化するというお願いをしたんです。そんな支部例会を2年に渡って行い、奈良大会を迎える訳なんです。そこでわかったことは、大阪支部の実践は、子ども発や、コテコテの実践だということです。とにかく子どもが困っている姿から教材化しているとか、子どもの抱える課題を対象にして実践しているのです。また、大阪の実践は、発達の視点を持っていると言うことです。同志会の実践というのは「金太郎飴」みたいで、どの学年でも発達段階関係なく同じようなことをしている。それで良いのか？と言うことです。やっぱり学年ごとにふさわしい教材というのが望まれると言うことです。これらのことを踏まえ、職場に働きかけ、それが学校の教育課程づくりにつながっていくんじゃないかなというふうなことがこの2年間にわかったと言う事です。研究をして、新しい実践を創り出すということはなかったけど、実践報告からわかってきたことも結構あったなというような2年間だったと思います。

⑤「球技研究」(2005年～2009年)

(佐々木) その後、2005年の後に研究部長と言うことで、まあ「やりたいことやれ」ってな感じやったと思うんです。「そう言われてもな」というのもあったんですけど、ボール運動をやりたいなと思ったんです。その中で、中村圭子さんが全国大会の低学年分科会で実践報告する、ボール運動という話があって、シュートボールでするところに飛びついて、低学年の球技からやっていこうと思ったんです。結果としては5年間、低中高というふうにできたので、個人的には面白かったなと思うんですけど、それこそ低学年だったら「2:0理論」からというのがあったけど、そうではなくて、1対1でやって、ボールへの寄り付きであったり、そこ追いかけんでもいいのに追いかけていく1年生だったり、ボール持ったらとにかく自分でシュート打つんだみたいなこととか、そういうのを実践を通してやっていきました。低学年のうちは思いっきりボールぶつけるとか、壁に新聞紙貼って思いっきりぶつけてとれるかどうかみたいなことを延々やるとか、そういうことを中村さんが子どもの思いから実践化してもらったところで、最終的には2対1でパスというところまで行ったんですけど、その前の段階をすごくくぐらせるという意味では、当時「じゃまじゃまサッカー」が出かかっていた、その辺のところ船富さんの思いもありつつ、1対1というのがあったのかなあ。それで2年目が、ラグハンド。これが古川実践で、4年生でラグハンドをしたというところで、その辺で「重要空間」みたいな話というのが当然あって、そういうところを実践から、作戦づくりで重要空間を意識させる事を考えつつ、でもやっぱり理論的に弱いなというふうになったんですね。それで「時空間論について学ばなあかん」と思ってて、学べなかったんですね。わからなくて、本読んだりしても。あと、同志会の球技の理論と言うことについても、やっぱりもう一度きちんと学びなおさなあかんということで、3年目に理論学習をしたんですね。理論学習のための実技をやったり、榊原さんに「陸上の時空間論」についてクレオの和室で講演してもらったりしたんですよ。研究部だけで。それはとっても「なるほどな」と思って「時間の空間化」というやつで「あーなるほどな」と思いながら、そのへんの時間と空間をどういう風に考えておいたらいいかということも陸上のところから学ばせても

らって、球技だったらどういうふうにかえたらいいかなというところを考えました。そして、4年目5年目はバスケットをしました。佐々木のバスケットと楠橋さんのバスケットをやって、そこでもどういうふう子どもたちが空間を見ていくか、空間認識の発展みたいな事を一定まとめていった2年間だったなあと思います。これは空間のことは別として、佐々木実践はどっちかというドリブルを、同志会実践に多いんやけど、ドリブルをなくそうというやんわりとした圧があって、「ドリブルじゃない方が、パスにした方が早く重要空間にボールを持って行けるよ」みたいな、やんわりしたやつでやってたんですけど、楠橋さんは6年生のバスケットで、ドリブルすると実はディフェンスがちょっと揺さぶられるみたいなのを気がついたり、子どもの動きの中から意味とか、プレイに対する意味とか、そういうのをまとめるのができたなあと思ってます。これ、今はないんですけど、この当時までは「研究B会議」というのがあって、月に何回か集まっていたんですね。三局会議だけでということではなくて、だから、その辺ができてた最後の時代だったと思います。じゃないと授業進んでいく中で、つぎこうなった、ああなったというのを拾えていかないし、次こんなふうに指導しようと、実践の長さにもよるんやけど、それができた最後の時代やったんちがうかなというのは、研究を考える意義という意味ではここまでやったのかなと思います。

(4) 他団体との関わり

(黒井) かつて教師の2つの任務と言うのがあって、伊藤高広が言ったかどうかとかはよく分かりませんが、1つは自分の学校をどうするのかと言う学校論を実践すること。もう1つは地域に出てどうするのかと言う事です。この2つの任務をやるというのは世界的にも余りないみたいで、日本だけがこういう2つのことをやっているようです。教師は地域に入ってどのように活動していくのか、この2つの任務について話を進めて行きます。今回の地域について、広く捉えたいと思います。例えば、大阪の教育はどうするのか、サ連協で榊原さんとか前田さんがどう関わってきたのかについて話してもらいます。もう一つは、官制研や、楠橋さんが関わっている関体研の協力共同の実践とか、小中の中で同志会の実践の中で大阪ではどうなっているのかということをお話してもらいます。大阪には、小中体育研究会というのがあります。8ブロックあるそうです。僕は平成18年の資料を見たのですが、8ブロックのうち6ブロックが同志会の実践だったと思います。そこには、「南中ソーラン」の実践が2つありました。これもやっぱり民舞教室の成果で、大阪府下で大体最高時500~600人集めたんです。枚方では120~130名来て、舞台の上とかフロアそれから音楽室とか使ってやった。1ブロックでこれだけ集まったんです。当時、デンマーク体操が2000人来たんです。その4分の1位は同志会の民舞教室に来てたと言う事は、かなり影響力があったと言うことです。運動会実践が中心なんですけども、そういう役割を担っていたのではないかと思います。また、「南中ソーラン」「フラグフットボール」「リレーの実践」「ハンドボールの実践」なども見かけました。

まず、榊原さん前田さんの方から、大阪の教育について語っていただきたいと思います。お二人は、サ連協に深く関わってこられた経緯があります。大阪大会後の状況を榊原さんに、その後のサ連協の状況を前田さんに話してもらったらいいいと思います。

①サ連協と同志会

(榊原) 私は85年大阪大会を迎える段階で、サ連協に同志会代表として既に3年間ぐらい関わっていました。その中での同志会の位置とか役割とか早くに判っていたし、ある程度知り合いもできていたから、大阪大会のときに『主体者形成への道』という本でまとめていますけども、1冊目は、同志会のコアな方々の講演で勉強してもらったんですけど、2冊目に大阪の人を招いて話を聴きました。

「歴教協」「なにわ作文の会」大阪を代表するような「科教協」とか、しっかりした団体に、この人よんだらこの話が聞けるということが分かっていたから、お願いして組織していったんです。やっぱり体育だけでものを考えていたのでは発展的な研究ができないと、当時からそう思っていました。その後、私は同志会でポシャってたんですけども、まあたまたまサ連協に居場所があって、ものすごく必要とされていた時に事務局を受けて、結局15年間同志会を離れて、ずっとサ連協事務局長をやりました。大阪大会で潰れて、2000年のサ連協集会を最後にやって引退したんです。その時はお茶を濁して前田さんに無理矢理全部渡したと思いますけども。その間、1990年に近畿東海サ連協集会をやってるんですよ。大きい大会ばかりあれだけやれたなあと思いますけども、85大阪大会で自分は潰れたことは分析できないままだ



ったけども、力抜いて人の力に依拠して、要するに、実力ある人たちはいっぱいいるから、どういう風にそれを1つのものに集約していくんかという、全然違うやり方でやりました。団結型はやめて、連帯型にして、あっさり大会作りの方針そのものを宗旨替えしてたと思います。それは日教組が分裂させられた。ついに。その年だったんです。教師も危機感を持ってたことが大きいと思いますね。同志会大阪大会の倍規模の大会になってしまって、フタ開けたらびっくりという、どこも椅子が足りないまま始まったような分科会ばかりでした。多分1600人ぐらいの大きい集会やってるんですけども、それは、どういったらいいんか、同志会じゃなくて近畿東海という枠組みでそこに響くような「元気の出る教育大集会」、打ち出しが大事でした。教育の危機、民主主義の危機というのはみな分かっていたから、とにかく情勢にフィットするような形の大会にしたのは間違いないです。それは広い意味では地域論、近畿東海という伝統ある日本の民教連の草分けみたいな理論的にも実践的にもやってきたサークルだったので、その連合体をすることで、私が自分の力になって戻ってきたものは、例えば、綴り方とか、歴史教育であるとか、そういう我々が体育以外のものにもものすごく力を発揮せんとでけへんこと、言語表現とか社会認識そのものをやっている研究団体があるわけで、そういうところから吸収して実践が変わっていくという体験を僕はしました。今までなかった健康教育実践をクリエイトできたのは、サ連協15年やったからです。対話の授業は「売春」の実践がスタートですけども、形になってきて自分で整理がついて、理論的にも説明ができるのは、生活綴り方のおかげですね。生活綴り方であって、生活教育であって、かつ保健体育教育で、かつ地域論を含んだものでした。それはサ連協の軸になりながら、サ連協から学べることができたということが大きかったです。

『土とあぶら』という廃刊になった雑誌を復活させてこれを10号近く出しました。今から言えば、ようできたと思うんですけども、そんな仕事もやっていた。久田さん(大阪教育大)とか松浦さん(和歌山大)とかもいて、僕がいてへんかったら成り立てへんということは、向こうもわかってるし、僕がやろうとしていることのバックアップ体制というのは教育研究者としての熱いものもあつたし、僕が直接師事したんは高浜介二(大阪教育大学)や思ってるけども、学べる人がすごくサ連協には多くいたんですよ。歴教協の南部さんとか、科教協の内田さんがいて、同志会で言うと第一世代、中村敏雄世代、戦後民主主義を自分の成長の過程で吸収しながら教師になって、そういうことを守って闘ってきた人達でした。いっつもこつてりした話を聴いてて、青木一がその頂点にいた。何喋っててもコクのある面白い話が聞けた。だから総合性を高めたのはサ連協に身を置いたからでした。これ間違いない。ただ、同志会がその間、どれだけやっているかというのは、僕は解ってたし、サ連協の他サの人達も、みんな同志会の組織力の高さ凄さはすごく高い評価だった。「体育の先生は、やっぱりよう動きまん」みたいな俗っぽいレベルで知られているという浅い人も多かったです。ただ理論学習をすごくやってるから、論戦ですごく強いとか、そんなところでは一目置くような、そんなサ連協の世界で、長いこと働かせてもらったんですよ。

地域論とかまとまりのつけへんことやけども、学校の中だけでは、体育の中だけでは、吸収できないようなたくさんの学びが、コミュニケーションを伴って吸収されていくと思う。僕は同志会やってる時に、既にそういうことを大阪大会のその後のことを考えながらいろんな手を打ってきた時期に、人間の発達とか組織の発展のために、「同化」と「異化」を考えていた。これは、ピアジェの言葉ですけども、生物が成長発達していくために、「同化」せんといかんわけですよ。炭酸同化作用と言ってるわけね。みんな自分の血肉に変えていく。同志会はそーゆー熱い人がいっぱいいて、出て行ったら何か生き返るとか、賢くなって帰れるとかあるでしょう。行くだけでも何か凄いことをやってる気になってしまう。それはでも「同化」ばかりや。そうじゃなくて「異化」せなあかん。同志会やからみんなどんぐりの背比べで、金太郎飴みたいになっていくと、発展性は無いから、異質なものをどう自分のものにしていくのか、「異化」というものをどうシステム化するかということ。別なまとめ方すると、ブロックとかプロジェクトとか部局とかそう言う強いもの作らなあかんという「異化」の組織をつくらうとしていた。みんな、グループ学習の時は、「異質協同」とか普通に言うてるのに、自分が責任をもたなあかん時になると、もたれ合いになりがち。独習せんと例会だけ出てきて、情報貰っていくというようなことも、普通にあることやし。これは、来るだけでもマシヤから、批判の対象ではないけども、責任持たなあかんポストの時に、それでは成長が止まるから。そういうことにならないようにどうするのかということであって、自分にとってみては、ここで何か教訓みたいなものを伝えるとすれば「異化」ということです。だから、異質なものをとにかく身に付けていく。それは自分が発達するということ抜きにはないわけやから、今までやっていなかったことをとにかくやってみた時どうなるか、教育実践の上で、同志会では割とやってはるから、牧野実践や楠橋実践を聞いててもね、かなりハチャメチャなことをやってるでしょ。やっぱり、「どこの支部もやってるようなことをやりたくないわ」という感覚。大阪のエエとこはやっぱりそれですよ。何かというと、リアリティーだ

と思う。自分が納得でけへんねん。生活性のないようなことは、それはやっぱり大阪という風土があって、歴史があって、個々のアイデンティティがあるもんやと思うし、「東京があんな言うねんやったら、大阪はもっとちゃうことやったるわ」という風に、そんな感じで来てたと思います。大阪サ連協というのは、いろんな形で学ばしてもらった場所やったと思います。それが地域論というのかどうかわかりませんけど。

(黒井) 続いて、低調になったサ連協のことを前田さんから。

(前田) 僕がサ連協一番よく覚えているのは青木一さんが作ったと言うことです。1つのピークってというのは青木一さんが亡くなられて、送る会がありました。大阪の民主教育を作ってきた人たちがは結集した感じかなと思います。その中心に榊原さんがいて一番のまとめ役やったんかな。その後なのですけども、榊原さんなきあと、民間教育団体の冬の時代、サークル冬の時代がやってきたのかな。サ連協の大会がだんだん縮小してきた。湯浅誠よんだとき榊原はいてはりました？

(榊原) いてへんね。湯浅誠よんでんねや。

(前田) その後、僕とか、数教協の何森さん、科教協の今西さん、日生連の井関さんとかが中心となって、大阪で東海近畿サークル連合会の研究集会を主催した時に、開会行事では、当時、「年越し派遣村」の村長であった湯浅誠さんを記念講演に呼んだりとか、久田さんに頼んで大教大のエイサークラブにエイサーを披露してもらいました。大阪の実行委員会は研究だけでなく、そういうイベントも重要だから企画したと思います。これも同志会流です。当時、朝輝さんと中井さんという、まったくの新任者を司会者に抜擢しました。あの2人は元々力があつた。ほんとにその期待に答えてくれて、他のサ連協の人たちがびっくりしていました。当時、貧困が社会問題となっていたので、あの集会で湯浅さんをよんだのは時宜にかなったものでした。関心が高く、参加者も会場いっぱいになりました。宣伝もしっかりなされ、柏原市の校長も湯浅さんの講演を聞きに来ていて驚きました。サ連協集会が隆盛を誇ったのは、まあそこまでです。その時のサ連協集会が最後の大がかりな大会でした。

サ連協の事務局として他の団体とかかわるうちに、僕が考え違っていたことがありました。教文センターとサ連協との関係です。教文センターは、大阪の主任手当の拠出金で財政的基盤があつた。退職した人も事務局に入り、給料も払われていたみたいでした。教文センターには事務所もあつて僕はそこと連携しようと思ったのですが、うまくいかなくて、違う組織形態だと思い知らされました。僕ら民間教育団体は組合からも財政的な支援もないし、本当に自分らの手弁当でやっていた。それがわかつた。財政的なことをしっかりしないと、サークルは潰れていくものだと思います。

教文センターはかろうじて組合からのサポートもあり、主任手当が無くなったものの、サポーター制度でお金はなんとか集めて生き残っている。安武さんがさっき言われたように、給料が上がってきた時期ではないし、そういうところの財政的な基盤がないサークルは、なくなってくるかなと思う。それでも、なんとかまあ東海近畿は生き残っている、それは、今は何森さんが一人奮闘していて何とかやっているのが実情じゃないかと思います。また、牧野さんは奈良でもちゃんと組織してくれるので、細々と今もつながっているのかと思う。

かつて、東海近畿サークル集会の影響力はすごくあつたと思うんです。例えば、湯浅誠を記念講演者にしたのも、そうですが、同志会静岡支部の大野木さんが静岡で東海近畿サークル連合会の集会を開催した時、その当時あまりメジャーではなかった内田樹氏をよんでいる。僕も内田さんの講演を聴いたんですけども、時代を読み影響力のある人やと思いました。そんな人を目ざとく見つけて講演者にして、サ連協の研究集会を組織し、教育運動を展開するというのは、また同志会とは違う発信力があると思います。

(榊原) 教文センターとの関係で1つだけいうと、「教育研究運動は組合運動よりも広い」(伊藤孝弘)。これは貴重な指摘で、組合ってもののやっぱり権利のためにやる。自分の生活の問題ですから。教育研究は違うねんなあ。やっぱり真実というか、教育の自由のための組織。そういう違いがあるので、どうしても教文のセンターと一つになれなかつた。大きな断層でした。そこをつなげる人がないままに、両方ともがぼしゃって行つたと言う感じがある。一時は、教文センターにはよく行つたし、分科会にも所属していて本も書いてます。組合運動よりは広範なことができてたんやと思う。でも金がない。みんな自前で金払ってやつた。そっちの方が自由があつて。組合はやっぱり縛られる団体です。まあ、サ連協でそういうことをやつてきたんですけども。

(前田) まさに、そういう関係で、僕らは秋桜高校の先生方とつながったんですよ。それまで同志会と秋桜高校は全然関係なかったけど、サ連協集会で同志会の川渕さんと秋桜高校の卒業生の方が若者シンポジウムのパネラーになりました。なんと、その卒業生の方の応援に秋桜高校の先生方が来られていたんです。そこで、同志会大阪支部と秋桜高校がつながった。秋桜高校の教育実践は、今や大阪支部の研究実践や教育運動に大きな影響を与えています。

②官制研や他団体との連帯

(黒井) そしたら、次に、楠橋さん関体研とか官制の研究会について話してください。

(楠橋) 支部活動の中心となるのは研究と実践と言うこと。自分のことを考えると、研究に向かえるきっかけがある。それを羅列的に考えてみたら、例えば、「体育の学習に困っている。」とか、「魅力ある研究会に出会う。」だとか、「目を見張るような実践に出会う。」「魅力ある教師がいる。その人に誘われる。」「研究会に気軽に行ける雰囲気がある。」等ではないかと思います。その中で同志会にぼくは出会いました。そこで賢くなってきた感が自分の中に出てくる。これがまた逆に悪い方向に出ることもあります。ぼくは最近、飛ぶ鳥を落とす勢いのある教師たち、40代の教師たちに「自分は周りのみんながアホに見えるやろ。」と言うんです。ぼくも、同志会の先生方以外の周りの教師に魅力のなさを感じたりしたことがありました。それは、やっぱり態度に出る。ものの言い方とかに出るけど、結局その先生が、皆含めてちょっとこそばい言い方かもしれないけど、教育に携わる仲間と捉えないと、自分一人では何もできないし、そこが僕の中の一番大きなことでした。例えば、安武さんなんか、すごい一生懸命、若い頃やから理路整然と物事を言うんだけど、安武さんが職場からいなくなったら、みんな敵になるんですよ。要するに、理路整然と心理語っても煙たがられる可能性もある。そこに「共感」があった上での「助言」とか、「提言」とかをセットでないといけない思えてきたのです。それができるのは共に研究している仲間。仲良いと言ったらおかしいけど、侃侃諤諤(かんかんがくがく)と言っても、例えば、ぼくだったら、船富さんのことをいろいろいじるようなことを言うけど、あの人のことをやっぱり尊敬してるし、そういうのがある。職場で、現場で、闘っていると言うところがそのぼくらの活動に興味を持ってもらえる早道なのかなと思うんです。これは異論があるとは思いますが、もちろん言いたいこと言わなアカンし。ただぼくはぼくの悩みを包み隠さず放出するし、困ってる同僚がおったらアイデアを出し合うということが、研究会に参加してもらい大きなきっかけになると思うんです。それは安武さんとかが体現していて、教育実習に来た朝輝さんとか、同じ職場の川渕さんとか、そのまま同志会で続いていると言う事からもわかると思います。そういうぼくも、安武さんの弟子の一人となるわけで、そういうのがあります。

ぼくが官制研に参加するのは、そういう意図がある。ぼくがよく参加していた頃は、官制研に参加する同志会員はほとんどいなかった。僕はこれはセクトだと思うんですよ。セクトと言われても仕方がない。所属する組織は幾つかあって、例えば市教研に参加すると同志会の実践を提示できるでしょう？自分がやるということだから。所属の体研で研究もそれでリードできるんですよ。理論では全然負けていないから。討議の内容は薄いかもしれないけど、確実に同志会の実践は、驚きを持って迎えられる。こういうことが契機となって官制研の内容に変化が起きる。例えば、昔だったら官制研では運動量の話ばかりだったんですよ。でも、関体研がちょっと出る位の頃から、マットでは、腰上げて逆さ感覚つけさせなアカンとか、僕じゃない全然知らない先生が言うんです。若い子が。びっくりしてね。こんな時代になっちゃってるのかなって思ったことがあって。実は、それは関体研のメンバーだったんです。まあそういうことがあって、同志会の実践だとか考え方とかは、比較的真面目な若い教師には受け入れられているんですよ。だから、どんどん打って出るべきだし、積極的に官制研に参加するべきなんです。少し前ですが、柏原市の先生だと思うのですが、官制研で、「楠橋先生に教えてもらった。」なんていう話が出てきました。何かのきっかけで、同志会ではない人の実践が結構同志会的だったりするようなことが生まれてきてるんです。官制研に何か参加していて発信していると、一定の評価が出てくる。やっぱり官制研でこそ同志会の考え方が伝わる場という見方もあるのです。もちろん危険もはらんでるんですよ。一人歩きするし。でも、もう「ドル平」だって、先ほど話したように、同和教育の中で「誰でも泳げるようになる」と、取り上げられていたことだってあるんです。そこを恐れてたらやっぱりだめだと思う。だからこそ、学びたい中身があると思って出てくる教師を支える組織が必要です。それが、同志会でなければならぬし、それができる場所ではあると思っています。

ぼくは、数年前から関体研に参加していて、最近あまり行っていないんですけど。きっかけはみの

お大会の1年前か2年前に行ったのがきっかけなんです。それは、何でかという、そこの代表で垣内先生と言う人がいるんです。実は彼は、能勢が新任で、ぼくも含めて4人でベースボール型の授業を構想したんですよ。何がおもしろいか、とか、打つことがおもしろいか、考えて授業を構想したんです。同志会の発想も入れながら。授業を作っていく過程で、ぼくも「そんなことは、あかん。」とは言わず、彼のやり方でやりたいようにやってもらって、僕のことを知っていてくれていたことと、フラッグフットボールの実践を管制研である「小中体研」に出した時に、実践を見に来てくれて、彼は教育大アメフト部のキャプテンだったけど、「アメリカンフットボールは、小学校の学習としてはどうなのか…？」と懐疑的だった中で、ぼくの実践を見て、「これまでフラッグフット、アメフトの実践をやりたいと思わなかったけど、先生の実践を見て、やりたいと思うようになった。」と言ってくれたんです。そんな事につながりができたんです。それから、関体研を垣内先生が立ち上げたところに「一度、来て。」と言われので行って見たんです。行ったら、月1回集まりがあるんですけど、40~50人若い先生がいるんですよ。何をやっておるかという、ある先生が提案したことを自分たちで実技やって、それについて討議するんですよ。分散討議してね。要するに、技術面のことに関しては、同じようなことをやっているんです。これで40人も来ている。10数名でやってるぼくらの例会からするとびっくりな状況でした。垣内さんの凄いところは、去る者を一切追わない、来る者全く拒まないところで、イデオロギーを加味しないところです。ある種危険ですが、窓口が広いことは、ある意味重要です。ぼくはこの前の関体研10周年の記念大会の時に、実践報告をやってくれと言われて、集団マツの実践報告をやったんですけど、イデオロギーに対して偏見のないことが功を奏していると思いました。同志会の考え方も似ているところがあって、「体育というのは軽んじられている教科である。それを変えていかないといけない。」という気持ちのあるところなんです。そこで、みのお大会の推進講座でシンポジウムの構想が生まれてきて、ぼくが「シンポジウムをやらしてくれ。」と提案して、関体研、TOSS、三重の官制研、全体研、同志会という布陣でシンポジウムやったんですよ。そこには同志会の先生も、他団体の先生も来てたんですけど、まあ交流を行うことができてよかった。いろいろな考え方を同志会の支部メンバーに聞いてもらえてよかった、と思いました。ただこれが単発で終わってしまってるから、そこで何か答えを得たとか、方向が一緒だったとか、そんな話ができなかったのが残念でした。そういうことをしてきたんです。「体育」というものをなんとかしようと思う気持ちは、TOSS先生も同じ。上(上層部)は知りませんよ。下の若い先生は一所懸命やってはるんですよ。そういうことで、共通することがいくつかある。でも明らかに違うところもある。例えば私たちが研究しているような「学習集団論」がないとか、教え合いは、「できる子からできない子へのアドバイスだと、先生が教えた方がまし。」とか言うんですけどね。まあまあそういうことがあるので、ぼくは、官制研とかのつながりを、いやつながりというか、まだまだ論議の手前ですから、論争の手前をしっかりとやっとなかったら敵対関係だけになってしまう、と危惧しています。大事なことは、そこに「子どもをどう育てるか。」って言うことを真ん中に据えることが必要なので、そういうことを必死にやっっていかなければならないと思っています。

(黒井) 続いて市教研で活動されている佐々木さんに話をお願いします。

(佐々木) 私自身、市教研に関しては、しっかりやってきたつもりです。部長になると、2年か3年に一回、アウィーナで発表するんです。3年間ぐらいの研究のまとめすんですね。しかし、同志会の実践などの発表をしても、何か反応があるというものでもありません。発表が終わった次の年は、コメンテーターになるんですよ。助言者になるんです。小中体研で世話役をしていた方がたまたま、佐々木が水泳を意識して実践していると言うのを知っていたので、吹田の水泳に私をコメンテーターにぶつけたんです。実践報告にどこまで突っ込んだらいいのかと思って聴いて、資料を見るとまあまあいい線いっとるんです。放課後に残して練習もさせているけど、やろうとしていることはそんなにドル平とか離れてはいない。吹田の水泳も、ゆったり泳がせたいと思っているのです。科学的な系統性は弱いけど、ゴールは一緒なので、子どものつまづきについてコメントしました。そこで反応があった。それを聴いていた高槻の人が、市教研で話をしてもらいたいとやってきました。それで、6月と11月に講演をしたんです。講演では、「同志会というサークルで学んでるんですけど、同志会を知っている人」と尋ねたら、50人中1人ぐらいだった。みんな同志会のことを知らない。このような機会を通して、同志会のことをアピールするのは大事なことだと思った。市教研で私が大事にしてきた事は、部長をしているときに、研究授業だけでなく実践報告を書いてもらうこと。研究授業をした後に実践報告まで書いてもらって、報告をしてもらう。それを皆で聴くみたいことやってたんです。部長を終わってからは、授業をしてくださった方に対して、榎原さんみたいな分析批評はできないけ

ど、自分なりに授業を見る視点を明らかにして、アドバイスをしてきました。そういうことを何年かしていたら、今、新しく新入会で来てくれた高口さんが、僕のコメントに対して反応してくれたので今、会員になって来てくれている。この間、一回目の中村敏雄学習会を南河内Bですると、どう反応するかなあと思ってたら、「めっちゃ面白かったです。」と言う反応がありました。よかった食いついてくれてと思った。僕が「近代スポーツ批判」に食いついたように、食いつくかどうかなんですよ。そういう例会を組織していかなあかんと思います。

(前田) 同志会でも官制研で中河内ブロックの大津さんが発表している。大津さんの学校が体育の研究指定校になって、大津さんは、近畿小体研で研究授業をしている。僕は津さんの授業を参観しました。愛知支部の堤さんも来られていました。他の分科会は閑散としているのに、大津さんの授業や後の分科会は人がたくさん集まっていました。ネクタイ、スーツ姿の人たちが。そこで、大津さんは、この授業は同志会の研究の成果みたいなことを話されて、同志会の宣伝ばかりやっていたのが印象的でした。ただ、大津さんの話を熱心に聞いていた人たちは、この官制の研究会で終わってしまっている。そこで食いついて、同志会の研究に参加してくれる人はいないような感じでした。

(楠橋) あれ、すごく評判良かったんですよ。最後の反省会は、八尾の大きなホールであって、そこに集まるんですけど、みんなそのホールに向かうんですよ。ぼくが歩いていたら、後ろで歩いていた先生が、「今日の体育のあの実践はおもしろかったな。」と言ってるんですよ。それが、大津さんの実践なんです。それくらい、あの実践は評判良かった。「打って出る」というのが、同志会に欠けているところではないかな、と思っています。

(5) 研究・実践の発信と保護者・地域とのつながり

(黒井) みなさんのしゃべりすぎで時間が相当迫ってるんですけど。もう地域を視野に入れた取り組みについて話し合いたいと思います。地域というと、南河内では、亡くなられた海堀さんの実践があります。ごみ処理の問題とかにも取り組んでいました。地域に出ていった報告をしていました。地域を視野に入れた視点で実践をしていました。そういう視点というのが南河内にあるのではないかと思います。水泳教室をやっているなんて異色でしょ。ブロックで水泳教室をやっているのはこだけやないかな。その辺りについて佐々木さん、何か話題提供してください。

(佐々木) いやいやいや。そんな地域をどうのこうのしようと言うのはないんです。海堀さんは、長野教組の委員長をずっとされていて、海堀さんの実践は、そう言う時期に産廃問題があって、そこに引っかかったんですね。水泳教室に関しては、牧野さんと、澤口さんと、佐々木の3人がおるから、水泳教室をしようかという感じの流れで、私が転勤したての久野喜台小でやったって言うことなんです。そうするとその地域の子どもや保護者にとってはありがたいなと言う感じだったんです。それが地域はどう取り込んでるか、そういうところの視点は、正直ぼくにはなかったなあ。そこからの発展とか展開と言うのは、なかなかイメージができていないというのが正直なところなんです。

(黒井) 安武さん、なにかありますか？

(安武) 僕は50歳近くなる位まで、親の方が歳が上と言うふうに見えていた。いつも。明らかに年齢下なんです。でも子どもの親の方が上って言う感じで、そういう接し方しか自分はできなかった。だからかしらんけども、若い頃は、親とどうやってつながろうかと言うことで、「小さい仲間」と言う雑誌を親と一緒に読んだり、地域教育懇談会を開いたり、それは組合なんやけど、していた。また、学級通信とかで、学習指導要領が変わったことを「これは大変なことなんや」ということをコラムという形で書いて、そういうのもある程度理解してもらえた。それをやっていたのが、豊川小学校の時でした。同和校だったけど、自分がやろうとしたときに、親とつながっているの、理解が得られた。今、学校の先生は、すごく若い人で力ありそうな人なんやけども、立て続けに2人が1学期と2学期頭で来られなくなった。きっかけは親なんや。僕も最後に支援学級やったんやけど、その時、半年ぐらいやったかな。親が夢に出てきた。それまで、支援学級だったから親もすごくやってくれていると言う感じだった。そういった人が、夏休みが終わった途端、手のひらを返したように、やっていると全て否定するように言われて、親との関わりと言うのは難しくなってる。だからこそ、そういうとことを大事しなくてはいけないし、今は担任とかやってないから、余り関係ないけども、親

とのつながりを考えないと、自分のことも出来ないし、地域ともつながることができないなど感じます。

(黒井) 地域をどうするかという課題は、やはり7ブロックのそれぞれの活動と密接に繋がっていると思います。南河内や中河内の水泳教室、大津さんの地産地消の実践など、地域の要求を取り入れた実践がこれからも重要になってくると思います。時間があつという間に過ぎてしまいました。最後に、これからの大阪支部を支える若い古川さんから、今後の支部のことについて、考えていることを述べてもらって、最後の締めをしたいと思います。では、古川さん。

(6) まとめ～未来の大阪支部を描く～

(古川) とうとう、これまで大阪支部を支えていた柱が抜けていく時代がやってきました。どのブロック、どのプロジェクトにおいても、その傾向は同じで、まさに世代交代の時代となります。しかし、教員採用数のアンバランスさにより、会員の年齢層にも大きなアンバランスさが見られます。抜けた分の柱を全て埋めることは、人員的に土台無理な話です。もし、このまま会員数の減少が続けば、次のような支部活動の変換が求められるのではないかと思います。①主幹会議(五役・常任・三局)の回数削減やオンライン化 ②部局員数の削減や部局数削減 ③合同ブロック例会の実施や支部例会の開催方法の変更 ④ブロックの合併 などです。これらを守るには、オンラインを効果的に使用しながら、会員にとって魅力ある研究活動を継続していく必要があります。しかし、根本的な解決には、やはり会員拡大が必要です。ただ、会員が増えたからと言って、あちこちで役を持ってもらうと、やはり同志会から遠ざかってしまう人も多くなります。そこで、会員が定着するまでしばらくは、時間に余裕のあるOBの人たちの力を借りるなどしながら乗り切っていくしかないのではないかと、やんわり頼んでみるのです。これから数年は力のある会員が抜け、先細りが予想される支部活動です。人事面を含め、多くの課題が噴出していくと思われます。しかし、そんな中でも大阪支部らしく、したたかに温かく研究が進んでいくんじゃないかと楽観的に考えている自分もいます。自分が谷間の世代とならないよう、次の世代への橋渡し役となっていきたいです。

(黒井) ありがとうございます。古川さんから後の世代が先細りにならないように、私らOB会の役割も大事になってくるということですね。無形の財産はたくさん持っているので、OB会の人たちを支部でも積極的に活用してください。

今日の座談会の参加の皆さん、ありがとうございました。大阪支部発展の原動力は、やはり3局7ブロック体制の維持とプロジェクト、学習会にあると思います。座談会の中で、私は、支部50年間の研究史の成果や課題を学ぶことは、今後の研究課題の方向性が見えてくると言いました。これからの現役組の皆さんの「読み取り」に期待したいと思います。長時間の座談会、ご苦労様でした。

